



夏山冬里

Forum

放牧病研究室 寺田 裕

私の名前はシゲコ。7才の日本短角種牛です。近頃は日本金髪種とか茶髪和種の人間がたくさんいるようだけれど、私は純粹の日本短角種。北東北の山の中で25頭の仲間と一緒に暮らしています。

今年も5月初めに山に上がってきました。山上げの日はハレの日で、私たちを育ててくれている源蔵さんや仲間の人たちは、ここで夕方までお酒を飲んで楽しそうに話していました。私たちは久しぶりに外に出るのは気分がいいけれど、源蔵さんたちもこの日を楽しみにしていたみたい。それから早いものでもう5ヶ月。まだおっぱいを飲んでいた息子のキヨタカも今ではすっかり大きくなって、ほらこんなに太い腕。もうひとりで草を食べています。

ここは山が深くてねえ、狐や狸、貉も住んでいます。そうそう、熊も住んでいてね、たまに出会うことがあるの。でも、私たちにとっては住み慣れたいいところよ。えっ、牧場なのに牧草がないじゃないって？林の下草や灌木の若葉、笹が私たちにとってごちそう。春のタケノコはとってもおいしいんだから。あら、食べたことなかった？私たちが林の下草や灌木を食べるから、木々はすくすく育つし、人間も手間いらず。どう、なかなかいい仕組みでしょ。水は沢水。ブナ林の落ち葉のダムに蓄えられていた沢水は冷たくて、とってもおいしい。

今年もナナカマドの実が真っ赤になったので、あと2週間もすれば、源蔵さんが迎えに来る。家に帰ると、キヨタカは市場に出されて売られていくのもうお別れ。毎年、山から下りると可愛いこどもたちと別れるのはつらいけれど…。実はね、今私のお腹の中には赤ちゃんがいるの。お父さんは今年一緒に山にいる、タケオさん。タケオさんはまだ若いけれど、落ち着いたいい雄よ。もちろん日本短角種。畜産組合の課長さんが太鼓判を押すくらいだから、今度の赤ちゃんも楽しみ。近くの牧場には黒毛和種の雄がいるそうだけれど、源蔵さんたちは私たち日本短角種が何よりも好きなんだって。私の仲間たちも、みんなタケオさんの赤ちゃんがお腹にいるわ。

あっ、あのバイクの音は善三郎さん。毎日私たちのことを見に来てくれる。この前、仲間のヨシコが怪我

をしたときも善三郎さんが見つけてくれたから、すぐに獣医さんが来てくれた。源蔵さんの軽トラックのエンジン音も私にはすぐにわかる。あの音を聞くとヨダレが出るの。だって源蔵さんは、時々私の大好物の味噌団子を持って来てくれるから。

私は夏はこうして山で草を食べて過ごすし、冬は里に戻って、源蔵さんが作った藁やフスマを食べている。源蔵さんはいつも「牛と人間は食べる物を競い合わないからなあ」と言いながら体を撫でてくれる。けれども、去年売られていった息子のカズヨシは、市場であまりいい値段がつかなかったとかで、ちよっとがっかりしていた。隣町に住んでいる源蔵さんの親戚の正吉さんは、去年、短角種から黒毛和種に変えたみたいだけれど、源蔵さんはおまえたちが好きだからって、大切にしてくれている。私は自分がお肉になることを考えたくはないけれど…、私たちの仲間って筋肉の中に脂肪が混じりにくいみたい。日本人って、霜降りとかいう脂肪の混じったお肉が好きなようで、私たちみたいな赤いお肉は外国から輸入されるお肉と競合しちゃって安くなってしまおうね。そんなことで、以前はたくさんいた仲間も、いまはすっかり減ってしまっ。「昔、この国には日本短角っていう牛がいたそうだな」なんてことになれば私たちもやっぱり寂しいし、ご先祖様に申し訳ないわよね。ご先祖様で思い出したけれど、私たちのご先祖様は南部牛といわれた牛で、とても働き者だったのよ。三陸海岸から内陸へ塩を運んだり、力持ちなんだから。

源蔵さんはもう70才。無理はしないようにしているみたいだし、何でも身近な物をうまく工夫するのが若いときからのやり方だって。「牛に出来ることは、牛にしてもらおう」「この土地のものを食べて、それを堆肥にしてまた土に戻せば、土地がいつまでも健康でいられる」と言うのが口癖。もう若い頃のように仕事は出来なくなったと言っているけれど、私たち頼りにしているんだから。これから半年は源蔵さんのおうちの牛舎で冬越し。来年の山上げの日までお腹の中の赤ちゃんと話しながら窓の外の雪を見る日が続く。私の名前はシゲコ。こんどの春は8才の日本短角種牛。